

# 明治の地獄

三遊亭円朝

青空文庫



え、一席申上げます、明治の地獄も新作と申す程の事でもなく、円朝が先達て箱根に逗留中、宗蓮寺で地獄極楽の絵を見まして、それから案じ附きましたお短かい落語でございませうが、まだ口慣れませんからお聞苦しいございませう。人間が死んで地獄へ行くとか、善を為したる者は極楽へ昇天するとか、宗教の方では天国へ行く、悪国へ墮ると云ふ、何方が本当だか円朝には分かりませんが、地獄からどうせ郵便の届いた試しもなし、極楽の写真を見た事も無いから、是は有るか無いか頓と分らん事で、人が死んで行く時は何んなものか、此の肉体と靈魂と離れる時は其の靈魂は何処へ去きますか、どうも是は分らん。此等の事を考へなければ本当の智識とは言へんと云ふ事ださうでございませう。随分彼の悟道の方には、「ガンコウ地に墮んと欲する時そもさんか何れの処に達せん。と死んでプウと息の止まつた時に此心は何処へ行くかと云ふ……何処へ参りませう、是は皆様方を伺つたら何処と仰しやるか知りませうが、円朝には分かりませう。大病でも自分で死ぬと覚悟をし、医者も見放した事も知つて居り、御看病は十分に届き、自分も最う死ぬと諦めが附いてしまつても、とろ／＼と病氣勞れで寝附いた時に、ひよいと間に眼が覚める事が有ります。男「いやア……

大層広い……こりやア原のやうな処だ……おや僕は丈夫だが、此間佐藤進先生が逆もむづかしいと云つたよ、それから妻が心配して、橋本先生に診て貰つたら何うだらうと云ふから、診て貰つたが、橋本先生に診て戴いてもむづかしいと云はれた、さういふ御名医方が見放すくらの病氣だから、僕も覚悟をして居たけれども、少し横になつてうとく眠られると思つたら、眼が覚めたやうだが……此んなぼんやりした処へ来た……遠くに電気燈でも点いて居るのか知ら、プウと明るいよ……こりや歩ける……今までは両方の手を持って腰を抱いて貰はんと便所へも行けなかつたが……これは妙だ、歩ける……運動に出て来たのか何だか分らん……おや向うへ女が一人行く、もしノ姉さんく。女「はい。男「少々物が承はりたうございますが、此処は何処ですね。女「此処は六道の辻でございますよ。男「え……それぢや僕は死んだんだ、こりやア驚いた、六道の辻だとえ、昔青山にさう云ふ処が有つたが、困つたね、僕は死んだのか知らん……姉さん何でげすかえ、矢張あなたは急病かなんかで此処へお出でなすつたかえ。女「はい私も疾うから参つて居ります、おやまあ、岩田屋の旦那だよ、貴方は賢虚なんでせう。男「馬鹿をいへ、さうしてお前は誰だツけ。女「柳橋のお重でございますよ。岩「なる程芸妓のお重さんだ、お前は虎列刺で死んだのだ、これはどうも……

…此方へ来てから虎列刺の方は薩張よいかね、併し並んで歩くのは厭だ、僕は地獄へ行くのは困るね、極楽へ行きたいが、何方へ行つたら宜からう。重「何方へ行つても最う造作ア有りません、直きですよ。岩「それでも極楽は十萬億土だと云ふぢやアないか。重「其処に停車場が有りますから、汽車に乗れば、すうツと直きに行かれますよ。岩「もう地獄へも汽車が出来たかえ、驚いたね。甲「へえ、どうも旦那、誠に暫く……。岩「いやア、アハ、これは吉原の幫間の民仲だね。民「へえ、どうも思ひ掛ない処で旦那にお目にかゝつたぢやアないか。乙「へえ旦那、誠に暫く、どうも宜くお出でなすツた。岩「なに宜くも来ない……こゝに川が有るね。民「これが有名な三途川と云ふので。岩「三途川にしちやア橋が有るね。民「旧は渡で対岸に大きな柳の樹が有つて、其処に脱衣婆が居て、亡者の衣服をふん奪て、六道銭を取つて居ましたが、渡しはいけないといふ議論がありました、それは水害のためにもし船が転覆へると蘇生る亡者が多いので、それでは折角開けようといふ地獄の衰微だといふので、此の通り鉄橋になつちまいしました、それ御覧じろ、三途橋と書いて有りませう。岩「成程、三途川は鉄橋が架るなど、云ふのはえらいものです。民「えらいなんて、地獄の開けた事を貴方にお目にかきたい位のものです、兎も角彼処に茶屋が有りますから入らツしやい。と

是これから案あん内に連つれて行ゆき、橋はしを渡わたると葭よし簀す張はりの腰こし掛かけ茶屋ぢやで、奥おくが住居すまになつて居をり、戸棚とだが三みつつばかり有あり、棚たなが幾いくつも有ありまして、葡萄酒ぶだうしゆ、ラムネ、麦酒ビールなどの壇びんが幾いくほ本ほんも並なんで居あり、中々なか届といたもので、土間どまを広ひろく取とつて、卓子テーブルに白しろいテてブル掛かけが懸かつて、椅子いすが有ありまして、烟草たばこ盆ぼんが出でて居をり、花瓶くわびんに花はなを挿さし中々なか気取きとつたもので、菓子台くわしだいにはゆで玉子たまごに何なにか菓子あが有あります、好よい菓子あでは有ありませあんけれども、萬ばん事届んじいて居をります。岩い「こりやア驚おどろいた、婆ばあさん茶ちを一杯ぱいおくれ。婆ばあ「お掛かけなさいまし、宜よく入いらつしやいました、さ此方こちらへ、汽車きしやの出でるにはちつと間あひが有ありますよ、今極いま楽らくが出でました後あとでございませあす、これから地獄ぢごく行ゆが出でます。岩い「妙めうだね、へえ、感心かんしんだね。ちやんと麦酒ビールの看板かんばんだね、西洋酒せいやうしゆのピラさが下さつて居ある所ところが不思議ふしぎだね、此この婆ばあさんは何なんですか。民たみ「これは脱衣婆だつえいばあさんななんで。岩い「ア、ア、三途川さんづのの婆ばあさんかえ。婆ばあ「はい旧もとは彼等あすこで六道銭だうせんを取とつて、どうやら斯かうやら暮くらして居をりましたが、今度こんど此処こゝへ停車ステーション場ばが出来るでるに就つて、茶屋ぢやを出でしたら宜よからうといふ人の勸すすめに任まかせて、茶屋ぢやを始めおぼちがたが、此方このが結句けつご気楽きらくです。岩い「怖こはらしくない婆ばあさんだね、新しん宿じゆくの婆ばあさんとは大違おほちがひだ。婆ばあ「何処どこも彼も貴方あなた実じつに立派りつぱに成なりましたよ。岩い「向うの微かすかに遠とい処ところに赤れんい煉れん瓦わがある、あれは何なんだえ。婆ばあ「陸軍省りくぐんせうでございませあす。岩い「へえ、陸軍省りくぐんせうが出来できま

したかね。婆「明治十年に西郷隆盛様や桐野様や篠原様が入らツしやいまして、  
 陸軍省をお建てになりました、それから身丈格好の揃つた亡者を選んで、毎日々々調  
 練でございます。岩「へえ、調練……これは面白いな、向うの高い山の上に白い  
 ものが見える、あれは何だえ。婆「あれでございますか、文部省が建ちましたの、空  
 のいい処でなければならんと仰しやいまして、森大臣さまが入らツしやいまして。岩  
 「へえ、驚いたね、大層揃つて出来ましたね、地獄のお閻魔さまは何うして居ますね。  
 婆「只今はお氣楽でございますよ、皆さん方に任せツきりで、憲法発布が有りまして、  
 それからは皆えらい方が引受けて何んでもなさるのです。岩「へえ、何う云ふ姿で、矢  
 ツ張り舌や何か出して居ますか。婆「重たい冠は脱つてしまひ、軽い帽子を冠つて、又儀  
 式の時にはお冠りなさいます、それに到頭散髪になツちまいました。岩「然うですか  
 え、十王様は。婆「十王様は宮様同様なお家柄でございますから、何も御用は  
 ないのでございませう。岩「錢札を付ける奴などは何うして。婆「彼は書記官に成つ  
 て居ります。岩「えらいもんですね、鬼なんぞは矢張角が有りませう。婆「いゝえ、鬼  
 の角は皆な佐藤の老先生が入らしつて切つてお仕舞ひなさいました。岩「へえ。婆  
 「ちよいと小さいシヤツポを冠り、洋服で歩いて居ますから知れませんよ。岩「あの浄

玻璃の鏡に業の権衡は何うしました。婆「業の権衡は公園にお茶屋が有りまして、其処に据付けて有りますが、皆さんが僕は地獄へ来てから体量が増えたなど、云つて悦んで居ります、浄玻璃の鏡は、ストウブを焚きます上に飾つてあります、縁だけ取換へて、娑婆の事が写る、僕は是だけ悪い事をしたなどと云つて在ツしやいます。岩「成程、血の池地獄、針の山などはまだございますか。婆「いゝえ、ございませんよ、岩崎弥太郎さんと云ふ方が入らツしやいまして、あの旦那様が針の山を払ひ下げて、其山を崩した土で血の池を埋めてしまひ、今では真ツ平らで、彼処が公園に成りまして、誠に面白うございませよ、女が燈心で竹の根を掘つたりする観物が出ますよ。岩「成程、へえ、婆「パノラマを往つて御覧なさいまし。岩「地獄へパノラマが……。婆「大層立派に出来ましたよ。岩「矢張りあの浅草の公園に在るやうな戦争の図かえ。婆「いゝえ、昔の地獄の火の車や無間地獄などで、此方に本当の火の車が有りまして、半分絵で描いて有つて、その境界がちつとも分りません、誠に感心だ、火の燃える処が本当のやうだ、怖いなんつて皆さんが仰しやいます。岩「成程、然うでございませかね、それから正月と盆の十六日に蓋の開くと云ふ、地獄の大きな釜は何うしました。婆「あれで瓦斯を焚きます、夜は方々へ瓦斯が点きますから、少しも地獄は怖い事はございません。岩

「へえ、開けたもんで。婆「開けたツて、貴方芝居見に入らツしやいよ、一日お供を致しませう。岩「地獄は芝居が有ますか。婆「有るかツて、えらいのが来て居ます、故人高島屋や彦三郎が来て居ます、半四郎や、仲藏なども来て、それに今度訥升に宗十郎が這入つて大層な芝居が有ります。岩「成程此方の方が宜い。婆「それから豊前太夫が来ました。富本上るりに庄五郎が来ましたので、長唄の出囃が有ります。岩「成程これはえらい、ぢやア見に行きませう。と云ふ処へガラ／＼（轟く音）婆「馬車が来ました。岩「お、お立派な馬車だ、大きな方だね。婆「あの方は山岡鉄太郎様と仰しやるお方です。岩「側に何か二人附いて居るね。婆「ハア、お一人は静岡の知事をなすツた関口さん、お一人は御料局長の肥田さんで、お情交が好いもんだから、何時でも御一緒で。岩「大層お忙しうで。婆「なに極楽へ行つて入つしやいました、近來極楽も疲弊を仕ましたから、勸化をお頼まれで、其事で極楽へ入らしたのでございませう。岩「極楽の勸化かえ、相変らず此方へ来てもお忙がしい。婆「それに関口さんと肥田さんは鉄道には懲りたと云つて、何日でもお馬車で。岩「何しろ奇態なもので……。と云つてゐる内に、慣れないから足を踏外して三途川へ逆トンボを打つてドブーリ飛込むと、岩「無無阿弥陀仏。々々々々々々々々々々々々々々

《く》。女「実に驚きました、彼なのお丈夫さまなお方が何うして御死去りになつたかと云つて、宿の者も宜しう申しました、嘸お力落しで……。婆「有難う存じます、良人は平素牛肉などは三人前も喰べました位で……。女「おや、お待ちなさいまし、早桶の中でミチく音が致しますよ。妻「魔が魅したのでせう。岩「明けておくれく、蘇生へつたから明けてお呉れ。岩「何とか云ひますよ、お明けなさい。と云ふから、早桶の蓋を取ると蘇生つて居る。妻「あらまアお前さん助かつたのかえ。岩「三途川へ落こつて蘇生へつた。妻「妙だね、ま嬉しい。女「斯んなお芽出たい事はございませぬね。岩「皆さんはお通夜のお方か、おやく物騒だな、通夜の坊さんが酒に酔倒れて居る、炮砥に線香をどつさり差して、一本花に枕団子旧弊だね、是から思ふと地獄の方が余程開けた。と云ふお話で。

(扱酒井昇造速記)

# 青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 明治の地獄

三遊亭円朝

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>